

キェルケゴールとキリスト教正教 —聖愚者と単独者—

中里 巧

1. 背景

セーレン＝キェルケゴールの思想が、その背景にキリスト教を抱えもっているということは歴然である。例えば、それはキェルケゴール自身が、再三その著作活動のなかで繰り返し、聖書にまつわる神や人を取り上げ、キリスト敬虔主義の流れである講話という形態をもった一連の著作群を、ほぼその著作活動の始めから終わりまで一貫して、記述して刊行し続けたことから明白である。また日誌遺稿においても、祈りの記述が散見され、その祈りの内容は、きわめてオーソドックスなものであり、キリスト教徒の祈りの典型ないしは模範のようなものとなっているからである。キェルケゴールが父ミカエルによって、神への生け贄として宗教教育をほどこされ、コペンハーゲン大学神学部や牧師養成所をとおして、神学教育や牧師研修を受けて、牧師資格を取得して教会で説教をおこなっているということもある。ただし、精神的観点からいって、神への生け贄・父ミカエルによる神への呪詛・こうしたことの背景にある罪意識といった事象は、北欧北方とりわけセディンク周辺地域をめぐる精神的古層と連動しているのは確実であり、当時のプロテスタントルター派教義や現在の我々のキリスト教理解からのみ判断すべきではないと私は思う。

本論文では、精神的な事象や観点をを用いるけれども、考古学的－神話的古層へ遡及するのではなくて、主としてキリスト教教義史のなかで、キェルケゴール思想を扱っていこうと思う。キェルケゴール思想におけるキリスト教は、教義史の観点からいえば、19世紀デンマークルター派国教会に属するものであって、その枠組みをほぼキェルケゴールは誠実に固守しており、大きく逸脱している訳ではないと、キェルケゴールの内なるキリスト教をあまりにも、容易か

つ安易に推察してきたのではないかと、そのような傾向がキェルケゴール研究において多かれ少なかれあったのではないかと、というのが私の見解である。

しかし、私は以前からキリスト教教義との関連において、どうしてもキェルケゴール思想理解において引っ掛かる事柄がいくつかあった。それは、私自身のキリスト教信仰と信仰生活実践のなかで、反芻されてきた引っ掛かりであり疑問であった。振り返ってみて、私にとってキェルケゴール思想は信仰実践の中できわめて大きな影響を保持していた。ただしその影響の仕方は、ひたすらキェルケゴール思想を文字通り貫くというわけにはいかず、むしろ、疑念・衝突・反芻・補正・再読・再評価・深化といった紆余曲折の繰り返しに他ならなかった。またこうした繰り返しは当然のことながら、私自身のキェルケゴール思想に対する研究を、規定することになった。

2. 「自由」概念

キェルケゴール思想を形成している主要概念のうち、「自由」frihedについては原罪論との齟齬がアポリア（難問）となり、「同時性」samtidighedについては教会の伝統や権威との齟齬がつきまとうように思われてならない。このように、キリスト教教義という観点でまとめて表現すれば、私は、信仰生活において引っ掛かってきたのであった。

なぜなら私が理解するかぎりキェルケゴール思想における「自由」というのは、善か悪か・罪か義かを選択する自由であり、キェルケゴールの著作『死にいたる病』冒頭の問題意識としての自己の定義のなかに、意欲するvilleという自由意志の発動が前提という仕方で織り込まれているからなのである。キェルケゴールは、『不安の概念』において、様々に原罪の発生について語って網を張っているが、いわばそうした論理の網をくぐり抜けて、そうした論理の網にどこまでも先行する仕方で、本源的に自由のリアリティが存在して、その自由からむしろ、そのつど罪が出現するというのが、キェルケゴールの主張であり、そのようにたまたま偶然に、そのつど罪が出現することをもって、原罪と呼称しているのが、とりわけ『不安の概念』におけるキェルケゴール思想ではないかと思う。

また、キェルケゴールの著作『哲学断片』のなかで「同時性」という態度がキリスト教信仰において必須の事柄であるとして提示されているのであるが、「同時性」というのは、イエス＝キリストに対する信仰とは、主体的には、地上に降り立ったイエス＝キリストの時代状況それ自体とともに存するということ、つまり、イエスの死後ないしは昇天後はじめて生を受けて、イエスの生前にイエスと出会ったことのない者であっても、イエス＝キリストに対する信仰は、全存在全人格としてイエス＝キリストとの全面的対面対決という仕方でのみありうるのであるから、イエスの死後に生を受けた如何なる者も、対イエス＝キリストにおいては、直接の弟子であって、間接の弟子であることはあり得ず、対イエス＝キリスト信仰においては、生前のイエス＝キリストに対するときと同じ状況が少なくとも精神性の領域においては、信仰者に出現するという意味であろう。

キェルケゴール思想における「自由」が原罪論と齟齬であるというのは、デンマーク国教会ルター派教義においては奴隷意志論を根拠としてキェルケゴール生前当時も彼の死後現在に至っても同様に、個々の教義学者の解釈の幅はどうあれ、少なくとも原理的には、自由は認められていないのであって、キェルケゴール思想における自由は、教義学上の事柄ではなくて実存する信仰者の実存的心理性として理解されることになる。しかしながら、信仰告白としての教義において認められず明白に否定されているものを、実存的心理性として肯定するということは、信仰者にとってまさに不条理である。教義において明白に否定されてしまったものを、実存的心理性という別の次元で拾い直すという込み入った信仰生活は、様々な諸問題と日々どのような仕方であれともかく格闘している信仰者にとって、十分な力を帯びた理解であるとは言い難い。

3. 「同時性」概念

キェルケゴール思想における「同時性」に、教会の伝統や権威との齟齬がつきまとうように思われるというのは、キェルケゴールがキリスト教信仰の本質として、彼自身の言葉に拠れば「直接の弟子」という対イエス＝キリストとの直接的対面性対決性を重視するあまり、「間接の弟子」の役割や意義をほとん

ど全面否定しているかのように、『哲学断片』においては理解せざるを得ないからである。教会の伝統や権威は、当然のことながら、イエス出現当時から現在にいたるまでの間接の弟子たちによる信仰継承を前提にしているわけだから、間接の弟子の存在意義が全面的に否定されるとなると、教会の伝統や権威はおろか、教会そのものの存在意義さえもが、否定されることになりかねない。しかしながら、キェルケゴール思想においては、聖書は時間と永遠の紐帯であるかのごとく理解されており、イエス＝キリストとほぼ等しい存在価値ももっていて、新約聖書におけるイエスの言葉はそのままイエスの言葉として、理解されている。だが聖書の存在こそ、教会の伝統と信仰継承の証しであって、間接の弟子というモチーフ抜きにして聖書はそもそも成立し得なかったのであり、まただからこそ、新約聖書上のイエスの言葉が歴史的に実際のところ、本当にイエスの言葉であるのか否か、といった新約聖書学の編集史的疑問が生起するわけであるが、キェルケゴール思想においてはこうした切り口、すなわち、聖書を間接の弟子の功績や業として見る観点はまったくといってよいほど存在しないかのように見える。無論、キェルケゴール思想のこうした切り口は、実際にはキェルケゴール自身のタクティクスすなわち戦術であって、『あれかーこれか』や『キリスト教の修練』のなかで若干述べられているように、時代状況に合わせて論点を収斂させるために、あえて客観的には偏りがあるかに見える主張をしているということがあるとは思われる。

4. キリスト教正教ーニケア＝コンスタンティノーブル信条ー

キリスト教は、ローマンカトリックおよびこれから分離発展したプロテスタントの専有物では決してない。正教側からすれば、コンスタンティノーブル・ローマ・アレクサンドリア・アンティオキア・エルサレムの五大総主教区の一体的つながりから、フィリオケ filioque というラテン語「子からもまた」を聖霊の発出理解に付加することによって、ローマンカトリックは、公会議において決定されてきたキリスト教の正統性から乖離した、と確かに云えるだろう。1054年に起こったいわゆる大シスマすなわち東西教会の大分離の出現である。ローマンカトリックやそれからさらに分離発展したプロテスタントの

教義には、原罪論があり、人間の自由意志は認められないが、381年第一次コンスタンティノーブル公会議において成立したニケア＝コンスタンティノーブル信条を遵守する正教会では原罪論は承認されておらず、人間の自由意志は、罪性によって致命的に破損していると理解したうえで、にかもかわらず、なお完全に破壊されているわけではないと理解して、肯定されている。人間の自由意志は、人間の深奥にある神性を根拠としている。正教は、人間の深奥にある神性を罪性によって致命的に破損しているものなお存在しているという仕方では認めるが、ローマンカトリックやプロテスタントは、人間における神性を原罪論の立場から承認していない。三位一体論についても正教における至聖三者は、聖霊論における聖神について、ローマンカトリックと比べてきわめて実在的・体験的に理解されており、自然界における神聖や聖性のリアリティについても、許容度が大きい。

ニケア＝コンスタンティノーブル信条は、現在なお正教・ローマンカトリック・プロテスタント諸派において神学的に正統として継承されているものであり、また、成立過程は異なるが内実的にはニケア＝コンスタンティノーブル信条の縮刷版である使徒信条も、正教・ローマンカトリック・プロテスタント諸派の一般信徒のなかで広く浸透している。そして、ニケア＝コンスタンティノーブル信条においても使徒信条においてもともに、「罪の赦し」という言葉はあるが、その罪が原罪であるとは記されていない。現在にいたるまでニケア＝コンスタンティノーブル信条の信仰を自分たちこそが継保持しているという正教の主張は、私には間違っていないように思われる。

5. 砂漠の父祖

コンスタンティヌス Gaius Flavius Valerius Constantinus (272-337) がキリスト教を公認する以前、イエス＝キリストの信徒は、ローマ皇帝が権力を一身に担い最高神祇官でさえあって神格化された地上の神であることを、嫌ったがゆえに、迫害を受けた。しかし、コンスタンティヌスによる313年キリスト教公認以後、イエス＝キリストの信徒は急速に、教会を援助するローマ皇帝の政策に妥協していき、迫害期における純粋な信仰から離れていった。ローマ皇帝が

援助する教会は、制度や教義をととのえ、イエス＝キリストの信徒は、そうした制度や組織に拘束されることになった。こうした拘束を嫌う信徒は逆に、教会に追われ迫害される事態に直面したのであった。そして4世紀中頃に、迫害期の純粋な信仰に復帰するため、教会との摩擦を避けて、エジプトの岩山や砂漠の地をさすらい、孤独にただ独り洞穴などで居住して神と向き合い不断の祈りに生きる一群の人々が出現したのであった。4世紀末にはこうした人々はアレクサンドリア郊外やナイル河流域に5000人におよんだ*1。こうした人々は、その後のキリスト教史における隠修士や修道士の基礎を形成し、後に砂漠の父祖 desert father と呼ばれ、その思想は砂漠の神学 desert theology と呼ばれるようになった。

キリスト教における修道の信仰上の起源を、モーセに率いられたヘブライの民のシナイ半島の荒野における40年間の放浪や、これを雛形とするイエス＝キリストによる宣教活動開始直前の荒野における40日間の試練にあると理解して隠修生活をしたのが、キリスト教成立初期のエジプトにおけるテーベ Thebai のパウロ Paulus (228-341) やアントニウス Anthonius (251頃-356) であった。そして多くの信徒が、迫害期の信仰を求めてパウロやアントニウスに倣ったのであった。

砂漠の神学とも呼ばれる、ヘブライの民の荒野における放浪を起源とする隠修生活の精神性にこそ、キリスト教の本質が存すると考えることは十分可能である。すなわち、教会制度や職制や位階ではなくて、ひたすら神を畏れ敬い慕う祈りの情念のなかにこそキリスト教精神が体现されるという理解である。

砂漠の父祖たちがキリスト教のローマ帝国国教化を由としなかった最大の理由は、ローマ皇帝が地上ばかりか天上の権力を掌握する最高神官であり、事実上の神として君臨していたからであって、国教化を認めるということはローマ皇帝という神のもとに屈服するということ、言い換えれば、旧約聖書の十戒にもイエスの生前の言葉にも、反することだったからであった。

*1 p.xvi-xvii in *The Wisdom of the Desert Fathers and Mothers*, foreword by Jonathan Wilson-Hartgrove, contemporary English version by Henry L.Carrigan, Jr., Paraclete Press, Brewster, Massachusetts, 2010.

6. キリストの兵隊

受難のイエスに象徴される宗教性Bとしての逆説的実存様態は、一切の合理的認識も一切の美的把握も不可能な様態としてキェルケゴールは、その著作『キリスト教の修練』において語っているが、そうした逆説的実存様態は、社会的には組織化されない「戦う教会」の構成員である個々の信仰者が、ひたすら信仰においてのみ理解し合うものであるとも語っている。ところで、こうした戦う教会ないし戦士としての信仰者という概念は、すでに迫害のさなかにあった初期キリスト教会において一般的であった「キリストの兵隊」という観念と思想潮流を同じくするものであって、決して特異なものではない*2。『キリスト教の修練』における「戦う教会」の構成員である信仰者は、いわば単独であって必ずしも現実に会合を開いて相互に交わりをもつわけではない。実際には一度も出会ったり見知ったりしていない間柄であっても、共に戦う教会に参加し共闘できるのだというのが、キェルケゴールの理解である。こうした理解は、きわめて抽象的であるように思われがちである。しかし、初期キリスト教会の迫害のさなかにあっては、裏切り・スパイ行為・挫折・虚偽・離反・妥協・屈従・憎しみ・暴力といった様々な事象が渦巻くなかで、一度も出会ったり見知ったりしているわけではない者同士が、互いに素性或顔さえ思い浮かべられないにもかかわらず、相互に祈り合い助け合ったということは、少なからず実在したと思われる。また、新約聖書パウロ書簡のなかでも、軍隊・兵隊・武器・武装といった言葉が、信仰者の在るべき姿として形容されている。

7. イエスの祈り

このように考えていくと、キェルケゴール思想における「自由」は、キリスト教正教がニケア=コンスタンティノーブル信条について保持している理解にきわめて近いのではないかと、という推測が成り立つ。キェルケゴール自身がルター派教義との関係で「自由」を如何に理解していたかと云えば、彼にとって「自由」はすでに述べたように、教義学の枠からはみ出る信仰者にとっての実存的事実であった。しかし、教義史という観点から云えばキェルケゴールの

*2 p.1 in *A History of Pagan Europe*, by Prudence Johe and Nigel Pennick, Routledge, 1995.

「自由」は、ルター派教義からは逸脱しているにしても、正教が理解するかぎりのニケア＝コンスタンティノープル信条のなかに十分留まっているのではないかと私には思われる。キェルケゴールはその著作『不安の概念』のなかで、人間は何らかの仕方では一人一人が自由意志に基づいて例外なく罪を選び取っているのであり、これが原罪の事実性であると語っている。こうした主張は、奴隷意志としての原罪論ではなくて、自由意志の発動の結果として引き起こされる事態について語っているのであるから、我々が何らかの仕方であるにせよともかく、自ら選び取った結果であり、最初から罪の奴隷であるのではない。また『キリスト教の修練』においてキェルケゴールは、信仰者がイエスを模範として実存的に生きるべきであることを、切々と語っていくのであるが、奴隷意志を認めるのなら、原理的に云ってそもそも信仰者が主体的にイエスにしたがって生きていくこと自体がナンセンスなことであるだろう。キェルケゴール思想における「自由」は、一度は罪を選び取ったにしても、神の恩寵の助けに拠って、その罪から脱することもまた、選び取ることができる自由にはならない。

キェルケゴール思想における「同時性」もまた、『哲学断片』の読者に対してきわめて抽象的－思弁的な印象を与える概念である。しかし、教会史上かつて砂漠の父祖と呼ばれるような、あえて、殉教のキリスト教を以てして、それこそがまさに純粋なキリスト教信仰であると受け取って、ローマ帝国におけるキリスト教公認以後にむしろ逆に、アレクサンドリア郊外やナイル河流域の岩稜地帯の岩窟に独居して、ひたすら祈り続けた一群の人々が実際に出現したのであった。そうした砂漠の父祖たちが希求した信仰の内実は、キェルケゴール思想における「同時性」が示唆しているような、ひたすらイエス＝キリストと対面対決し続ける祈りの信仰であり、そうした信仰は、かつて殉教の苦難の道を自ら進んで選び取って歩いていった迫害期の信徒が保持していたものであった。キェルケゴール思想における「同時性」が希求している内実は、まさに砂漠の父祖の信仰と同種のものであり、決して抽象的－思弁的なものではないのである。

砂漠の父祖の信仰は、18世紀に『フィロカリヤ』*Philokalia*と呼ばれるテキ

ストとして編纂された。様々な解釈が可能であると思うが、私が理解するかぎり『フィロカリア』は、「イエスの祈り」(Κύριε Ἰησοῦ Χριστέ, Υἱέ τοῦ Θεοῦ, ἐλέησόν με τὸν ἁμαρτωλόν / Domine Iesu Christe, Fili Dei, miserere mei, peccatoris / Lord Jesus Christ, Son of God, you would have mercy upon me, a sinner / 主イエスキリスト、神の子よ、罪人である私を憐れみたまえ)に凝縮されている。「自由」や「同時性」などを主要概念とするキェルケゴール思想もまた、イエス=キリストに対する祈りに凝集されるであろうというのが、私の理解である。イエスの祈りは、ギリシアの聖地アトスに巡礼する人々が、日々何百回となく繰り返し唱え続けたものであった。キェルケゴールは日誌のなかで、祈りはアルキメデスの支点であって、祈り人は世界を動かす、と記述しているが、彼は、一人一人の人生における実存的核心部に、いわば巡礼者のごとく日々イエスに対して祈っていく姿勢を以てして、信仰者の究極の姿の存在を見抜いていたであろう、と私は理解する。「イエスの祈り」Jesus Prayerは、正教において「魂の祈り」prayer of the heartとも呼ばれてきた。イエスの祈りを文字どおり唱えていると、心の表面からどんどん降りて行き、魂の根底に降り立ち、心の表面がどのような状況であろうと、ついには魂の根底においてつねにイエスの祈りを唱え続けている状態に至り着く。そうした特殊な祈りであったために、「イエスの祈り」は「魂の祈り」とも呼ばれてきたのであった。

イエスの祈りは、司祭と比較される取税人の祈りなどにみられる新約聖書における祈りを典拠としている。キェルケゴールもまた『大祭司・取税人・罪ある女—三つの講話—』のなかで同じ箇所を取り上げている。イエスの祈りの実践は、清貧な生活と無縁であるわけではなく、むしろすすんで神に近づくように生活も整えていくことが望まれる。そうしたイエスの祈りの中核は、イエス=キリストという御名であると云われる。自分のなかにイエス=キリストの神性が吹き込まれないし自分がまるでイエス=キリストになったかのように、身体や心の熱さを感じるようになる、と云われている*3。

*3 以下のテキストを参照：The Art of Prayer - an Orthodox Anthology, compiled by Iguumen Chariton of Valamo, translated by E. Kadloubovsky and E. M. Palmer.

8. 聖愚者・単独者・聖性

「聖愚者」(日本ハリストス教会の用語では「佯狂者」、ロシア語では Yurodivy、ギリシア語では salos または saloi、英語では foolishness for Christ/fools for Christ) とは、キェルケゴールの主張する宗教性Bの逆説性を体現している人物であり、すでに3～4世紀のキリスト教には、信仰の逆説性である聖愚者が実際に存在していたのであった。アレクサンドリア近郊の岩窟で終日神への祈りを捧げていた砂漠の父祖たちは、聖愚者の発端に位置しているであろう。聖愚者は、家も私有物もなく、ほとんど裸のまま放浪し、この世の権威に対して一切恐れず、ツァーリに対してさえ、忠言や苦言を呈することができた。実に聖愚者は、ロシアにおいて貴族と大衆双方から尊敬を得ていた。ロシアにおいて聖愚者を禁止したのは、18世紀、近代西欧化を押し進めたピョートル大帝 (Pyotr Alexeyevich /Peter the Great/ Peter I 1672-1725) 以降であり、聖愚者の禁令は現代にまでおよんでいる。しかしながら昔日の聖愚者像は、今日の正教会においては、隠者を端緒とする隠修士 hermit へ変容して、なお存続している。教会組織の一構成員であるとは云え、長い間、森奥の洞穴や岩窟に身を潜めて、できるかぎり他の人々との接触を絶ち、もっぱら祈りに専心する正教会の隠修士は、現代において聖愚者にもっとも近い人々であろう。ロシア正教では、とりわけプースティンヤ pustynja (砂漠・荒野・祈祷小屋) と呼ばれる生活形態を保持するプースティニク pustynnik と呼ばれる人々が隠修士として顕著である。教会史において聖愚者を聖人として列聖しているのは、正教であって、カトリックは列聖していない。ギリシア正教では列聖者4人、ロシア正教では36人である。なおプロテスタントでは、そもそも聖人という概念が否定されている。プロテスタントはあたかも、聖性そのものを拒絶してさえいるかのようである。

イヴァン雷帝 (Ivan the Terrible/ Ivan IV Vasilyevich 1530-1584) と聖愚者について面白い逸話がある。1570年イヴァン雷帝は、反逆の疑いがあるプスコフの街の住人を殲滅するために軍隊と共に赴いたが、街の門で聖愚者ニコラ=サロス (Nicholas Salos of Pskov 16世紀初め-1576) が、イヴァン雷帝を待ち構えていた。ニコラ=サロスはイヴァン雷帝に向かって、手のひらにのせた生

肉を見せて、おまえは人間の生き血を吸い生肉を食らう輩と叫んで、イヴァン雷帝の足元に投げつけて、無実の者を殺害する代わりにその生肉を食らえと諫言したのであった。イヴァン雷帝は、恐れおののいて、プスコフの街の住人を殲滅することを止めて、プスコフの住人は救われた。

その他の著名なロシア正教の聖愚者として、ウスチュグのプロコピウス (Procopius of Ustyug ?-1303)、ヴァシーリー＝ブラジュンヌイ (Basily Blazhenny / Basil the Blessed 1468ないしは1469-1552)、ペテルスブルクのクセニア (Xenia of Saint Petersburg 1719～1730-1803) 愚者グリーシャ Grisha the Fool (ロシア革命期) などがいる。

聖愚者の聖書における典拠は、コリント前書 1 : 25・4 : 10 などであり、神の知恵は人間の愚かさであり、人間の賢さは神の愚かさであるといった主張である。こうした主張と併行して、コリント前書 3 : 16、コリント後書 6 : 16 などにおける神の宮としての人間存在、エペソ 4 : 13 などにおける人間の聖化といった事柄が、思想的文脈として連なってくるであろう。

キェルケゴール思想における単独者概念は、精神史的古層としてはアウトローを背景に持っているけれども、教義的には聖愚者の近代的バリエーションであるというのが私の理解である。また、砂漠の父祖たちを現在においても、継承している隠修士がエジプトに実在する。彼らの主張には、彼ら特有の美意識がある。それは、砂漠・荒地・廢墟の美しさであり、透明性である。こうした美意識をとおして、彼らは明らかに、聖性を感知して、透明性と呼んでいると思われる。「聖性」概念の本質は、神が人や物に接触するという直接性に存している。エジプトの隠修士たちは、自然のうちに透明性という仕方で神を感知しているということである。彼らはまた、そうした透明性や聖性のリアリティを「沈黙」とも言い換えている。この沈黙は、キェルケゴール思想における「沈黙」概念ときわめて類似しており、著作『沈黙の世界』*die Welt des Schweigens*におけるM.ピカート (Max Picard 1888-1965) の思想とも充分に重なるものであると思う。

聖愚者の存在は、同時代に対する激しい批判を内包している。これもまた、単独者概念と類似している。キェルケゴールの「水平化」という近現代社会に

対する批判は、M.エンデ（Michael Ende 1929-1995）においては均一性という言葉を核にして、深化していく。エンデは、キェルケゴールの愛読者であった。

9. キェルケゴール思想理解の現代的困難さ

キェルケゴール思想は、我が国の受容史という視点から述べると、1930年代に実存思想との関連で解釈する研究論文が現れていることがわかる。一般に第二次世界大戦敗戦後の荒廃した日本社会においてはじめて、実存思想という衣装をまとわせたキェルケゴール思想が興隆し流行したかのように考えられているが、それには誤解がある。たしかに、実存思想的な解釈を施したキェルケゴール思想研究は、第二次世界大戦敗戦後に始まったわけではなくて、すでに戦時下において我が国において始まっていた。ただし、第二次世界大戦後、いわゆる戦後民主主義思想の台頭や学生運動の活発化にともなって、実存思想全般に関心が高まり、キェルケゴール思想もまたそうした思想潮流のなかで流行したことは事実である。しかし、我が国において1970年代後半における実存思想流行の退潮とともに、とりわけキェルケゴール思想への関心は一般読者層のなかで薄らいでいき、現在にいたっているように思う。

キェルケゴール思想は実存思想とトートロジーの関係にあるのではない。キェルケゴール思想に対しては様々なアプローチが可能であり、その思想内容や思想を形成する要素は多岐にわたっている。したがって、実存思想流行の退潮とともにキェルケゴール思想に対する関心も急激に失われていったことは、キェルケゴール思想受容史において、悲劇的出来事であったと思う。なぜなら、「実存」概念を用いずにキェルケゴール思想を研究したり理解したりすることは可能であり、また、そうした営みがキェルケゴール思想研究にはむしろ必要であって、そうした「実存」概念にとらわれないさらに広範な研究をとおしてこそ、キェルケゴール思想の魅力は明白になると私は思うからである。

1970年代後半から他の実存思想以上にキェルケゴール思想が、読者層の関心を失っていった主因は一体何であったか。

色々様々に推理することができると思うが、私は大きく、二つの要因がある

であろうと考える。第一の要因は、キリスト教との関連である。キェルケゴール思想はどのように考えてみてもキリスト教とは切断不能な関係にある。ただしその関係性は、既存のキリスト教会という組織との関係性ではなくて、キリスト教の理念、はっきり云ってしまえば、イエス＝キリストとの関係である。キェルケゴール思想の中核は、青年期の彼自身の言葉に拠れば、それを以てして生きもし死にもするような理念、すなわち、人生を生き抜き優れて死ぬために奉仕するものである。青年キェルケゴールは、そのためなら人生のすべてを賭けるばかりか命そのものを惜しまず死んでもかまわないと確信できる理念を希求した。こうしたそのためなら生きも死にもするような理念を形成するうえで、イエス＝キリストは人生の模範であり、神と人の紐帯であって、キェルケゴール思想上なくてはならぬ存在者なのである。と云うよりむしろ、イエス＝キリストという形像自体がそうした理念に他ならなかった。

しかし、我が国の読者層にとっては、こうした密接不可分なほど濃厚濃密にイエス＝キリストとの一体感を要求する思想というのは、受容しがたかったのではないかと私は推察するのである。また既存のキリスト教会に所属する多くのキリスト教徒にとっては、キェルケゴール思想における既存既成の教会制度や組織性に対するキェルケゴール自身のラディカルな非難や、漠然とした宗教観を許さず、一見するかぎり徹底して殉教にいたる道のみがイエス＝キリストの道であるかのように思わされるキェルケゴールのテキスト群は極端であり、悪魔的でさえあるかのように受け取られてきたのではないかと思うのである。

1970年代後半から他の実存思想以上にキェルケゴール思想が読者層の関心を失っていった二大要因のうち、もう一つの要因は何か。

それは時代性にあるのではないか、と思う。例えば文体。キェルケゴールテキストの文体は、当時のデンマーク文芸（文学・哲学・神学・戯曲など）のなかで突出して独特である。ひとつの文が長い、用いられているデンマーク語はしばしば他の作家・詩人・哲学者・神学者などが用いない使用頻度のきわめて少ない言葉が多い、会話体に近い印象を受ける、思想的には繰り返しがきわめて多く冗長な印象を受ける、などキェルケゴールを好んで読むデンマーク人

は、美文であり心地がよいと感じるであろうが、日本人研究者にとってこうしたデンマーク語の文体を精読するのは苦痛以外の何ものでもないように思えてしまう。さらに、こうした文体と相互補完的關係にある内容の外枠として、当時キェルケゴールが想定していたデンマーク社会の同時代の主な読者層である国家官吏としての国教会牧師などの教養階層の民度・文化・民俗があり、この階層の民度・文化・民俗が子細かつ濃密にテキストに縫い込まれていて、キェルケゴール研究者にとって、この階層の民度・文化・民俗が醸し出す雰囲気の間隔を受容できるか否かが大きなハードルとなっている。キェルケゴールテキストの文体に集約される困難さは、私が理解するかぎり、現代社会に存在拘束されている我々の拠って立つ有意味性体系（価値観・世界観の総体）とキェルケゴールテキストが存在拘束されていた有意味性体系が、余りにも異質になりすぎたため、そもそもキェルケゴール思想を表現するテキスト内容を形成する外枠を現代の我々の想像力を以てしてイメージすること自体が困難になってしまっているのではないか、と思うのである。

10. キェルケゴール思想における単独者概念

キェルケゴール思想は実存思想に留まるものでないと私は、先に述べたばかりであるのだが、にもかかわらず私は、人間性を真っ向から忌避する様々な毒や牙を隠すこともなくむき出しにする今日の日本社会の現況に住まいする我々にとって、キェルケゴール思想を実存思想的文脈から理解するのは、キェルケゴール思想を容易に理解するひとつの優れた道ではないかと思うのである。現代の我々が存在拘束されている有意味性体系と、キェルケゴールテキスト群が存在拘束されていた有意味性体系のうちに、共通する位相があるのではないか。有意味性体系は様々な位相（意識の階層）から成立しており、いわば地層のように幾重もウェファースが重なるように形成されている、と考えることができる。一枚一枚のウェファースが一つ一つのいわば意識階層であって、これは深層意識にまでおよんでいる。この意識階層は、意識の深層（無意識）の度合いを深めればそれだけ、変化や変容のピッチも遅れて、時間進行も緩慢になり、社会的輿論や時代の雰囲気や時代ごとの思想潮流に制約されにくくなる。

キェルケゴールがその仮名著作『哲学的断片の後書き』という著作で展開した「実存しつつ思索する」という「実存」概念は、そのような深層意識に深く根ざして人間精神の根本となっているような意識階層に属するものではないか、と私は思う。したがって、キェルケゴールがこの著作のなかで展開した「実存」概念は、19世紀中頃のデンマーク教養階層のみならず、21世紀初頭の現代日本社会を生きる我々においてもまた、十分に有効であるのではないかと思うのである。

問題は、キェルケゴールテキスト群のなかで「実存」概念を形容装飾するために用いられている様々な事象が、もはや我々の有意味性体系からは理解するにはなほだ遠いということであり、キェルケゴールテキスト群のなかに記述されている「実存」概念の真理性を救出するために、何らかのフィルターによる濾過作業が必要であろうということなのである。キェルケゴール思想における「単独者」den Enkelte 概念は、端的には実存するひとりの人間を指し示しているのであるが、この「単独者」概念は、北欧北方精神史の観点から理解するかぎり、アウトローの変容であろうと推察する。アウトローというのは元来、アイスランド古法『グラウガス』に記述されている法の治安の外に置かれた者のことであり、スカンジナビアや北ドイツ地域においては処罰のひとつであった。法の治安の外に置かれた者を殺しても処罰されないのであり、アウトローは死刑に相当する苛酷な刑罰であった。キェルケゴール思想の射程は、人間存在の余白や無意味さないしは非在性に向けられていると思う。

私は先に、キェルケゴールテキスト群のなかに記述されている「実存」概念の真理性を救出するために、何らかのフィルターによる濾過作業が必要であろう、と述べた。何らかのフィルターによる濾過作業というのは、ひとつには M.エンデであり、もうひとつにはロシア正教の伝統概念である聖愚者なのである。

ミヒャエル＝エンデは、戦後じきにキェルケゴールの仮名著作『死にいたる病』を読んでいて、自分はキェルケゴール狂になりたいといった思いを友人に吐露している。エンデはその後、影響を受けた思想のひとつとしてキェルケゴール思想を掲げていると同時に、キェルケゴールの他の仮名著作である『あ

れかーこれか』を高く評価して、キェルケゴールの理解する美的段階について深く共鳴している。エンデが美的段階に共鳴しているのは、キェルケゴールの美的段階の世界のなかに、エンデ特有のファンタジーの自由や創造性を巧妙に嗅ぎ取っていたからである。

代表的エンデ作品である『モモ』(Momo 1972)・『はてしない物語』(Die unendliche Geschichte 1979) およびこれらに先行する未完の『誰でもない庭』(Der Niemandsgarten. Aus dem Nachlass 1998) は、現代社会のなかで虐げられているが、それに無自覚ないしは半ば自覚しつつも無抵抗な多数の人々と現代社会の非人間性に対抗するけれども、そのように対抗するのは、失敗・愚かさ・無力さ・優しさ・存在そのものといったような武器ならぬ武器を用いて戦う少数の人々である。またエンデ作品においては、善と悪の弁証法的文脈や魔術に貶められている知恵が繰り返し使用されている。

キェルケゴールは、自らを宗教的詩人と語り、詩は虚構であると述べているのであるが、この虚構性こそ、エンデにおけるファンタジーの要なのである。エンデにおいては、キェルケゴール思想の土台そのものが虚構性であって、それゆえにこそ、真実が自由かつ十全に開陳されるとエンデは解釈している、と私は理解する。キェルケゴールは著作『死にいたる病』のなかで、人間精神の諸機能を支える働きとして「想像力」があると述べている。また、自己の定義において「それ自身がそれ自身を欲する」という表現で、根本的意欲ないし意志すなわち自由を希求し現出する力を以てして、人間精神の要諦を表現している。キェルケゴール思想における「想像力」がエンデにおいてはファンタジーに該当し、キェルケゴール思想における自由がエンデにおいては現代社会において剥奪の対象となっている人間性に該当するのではないかと私は思う。キェルケゴール思想において「単独者」概念の定義は、「神の御前に一人であること」であるが、これは、エンデにおいては人間の非在性すなわち現代社会にとっては無意味・無価値・役立たずとしてもっばら現出する人間の実像に該当するのではないかと、思う。

11. M. エンデと聖愚者

『モモ』に登場する少女モモ、『はてしない物語』に登場する少年バスチャン、『誰でもない庭』に登場する少女ゾフィーヒェン、戯曲『サーカス物語』(*Das Gauklermärchen* 1982)に登場する少女エリなど、エンデ作品には、愚者がしばしば登場する。新約聖書にある「神の知恵はこの世の愚かさ」という聖句を文字通り体現したかのような人物群である。こうした愚者性ないしは愚性ないしは「愚かであること」は、キェルケゴール思想においては「逆説」として、キェルケゴール思想の根幹に位置しているきわめて重要な概念である。ロシア正教の伝統概念である「聖愚者」は、神に対する限りない謙虚さを意味するのみならず社会的にはパフォーマンスの機能をもっていて、ロシア社会の既存の権力に対して神の正義を示す働きをもっていた。私は、キェルケゴール思想におけるキリスト教理解は、キェルケゴール自身がどのように自覚していたかはともかく、プロテスタントルター派神学よりも、キリスト教正教の教義に近いと考えているのであるが、キェルケゴール思想における「逆説」概念は、精神史的観点から云えば、ロシア正教の「聖愚者」と重なるのではないかと思うのである。

長野県黒姫童話館所収のエンデ資料のうち手紙を読み進めることをとおして、エンデ作品を支える思想的骨格がおぼろげながら現れてくるよう思われるのだが、『サーカス物語』や『自由の牢獄』(*Das Gefängnis der Freiheit* 1992)のなかで、二種類の「非在」性が描かれている。ひとつは、悪魔にとって愛などの善行が非在であるということ、もうひとつは、生身の人間にとって悪魔が非在であるということである。また、『はてしない物語』『魔法のスープ』(*Die Geschichte von der Schüssel und vom Löffel* 1990)『レンヒェンのひみつ』(*Lenchens Geheimnis* 1991)『魔法のカクテル』(*Der satanarchäolügenialkohöllische Wunschpunsch* 1989)では、悪が結果的には善を体現する大きな機縁となるように、物語が展開していく。エンデは、1980年頃の手紙資料を読むかぎり、既存のキリスト教会には希望を持っておらず、けれどもキリスト教の理念である信仰(信頼し無心であること)・希望(真実を希求して現実化する力)・愛(相互扶助や犠牲的精神)については確信を持っていたし、イエス=キリストの実

在を此岸と彼岸の紐帯者として認めていた。エンデは、手紙のなかで自分は生粋で筋金入りのキリスト信徒であると書いている。

キェルケゴール思想は、ミヒャエル＝エンデ作品をとおして濾過する、ないしはそうしたフィルターをとおして見直すことによって、今日の我が国の社会状況のなかで進行する非人間性に対して、強く立ち向かう思想として、現今の社会にとっては無価値であり愚者としてしか顧みられないけれども、人間精神の深奥に位置しているであろう内なる神にとっては真実を語る思想として、賦活するのではないかと思うのである。